

「高取町・紀路沿いの古墳・遺跡を巡る」

担当：井守徳弘

●予定コース

近鉄吉野線壺阪山駅—稲村山古墳・観覚寺遺跡—人頭石（光永寺・前庭）—子嶋寺—坂ノ山古墳群—佐田遺跡—束明神古墳—岡宮天皇陵—鳥ヶ峰古戦場—高取中央公園（昼食）—森カシ谷遺跡—鳥ヶ峰古戦場—薩摩遺跡—市尾墓山古墳—市尾宮塚古墳—近鉄吉野線市尾駅
(約 7.5 km)

●観覚寺遺跡

平成 16 年（2004）高取町教育委員会は、現在の床暖房である石組みのオンドルを備えた朝鮮半島系の特殊な構造の「大壁建物」と呼ばれる建物跡が出土され、時期は清水谷遺跡より後の **5 世紀後半から 6 世紀**と考えられ、東漢氏の居住地と推定されると発表しました。

観覚寺遺跡は古墳時代から中世にかけての複合遺跡で、その中心は 5 世紀後半から 7 世紀前半にかけての渡来人の集落跡であり、当時の渡来系豪族の生活を伝える朝鮮半島特有の石組みの方形池と床暖房（オンドル）（いずれも 6 世紀）と貴重な遺構が次々と見つかりました。

さらに、7 棟の大壁（おおかべ）建物跡も確認されました。集落外へ伸びる砂利敷きの舗装路や広場も確認され、『異国人街』の様子がよく分かる遺跡でした。

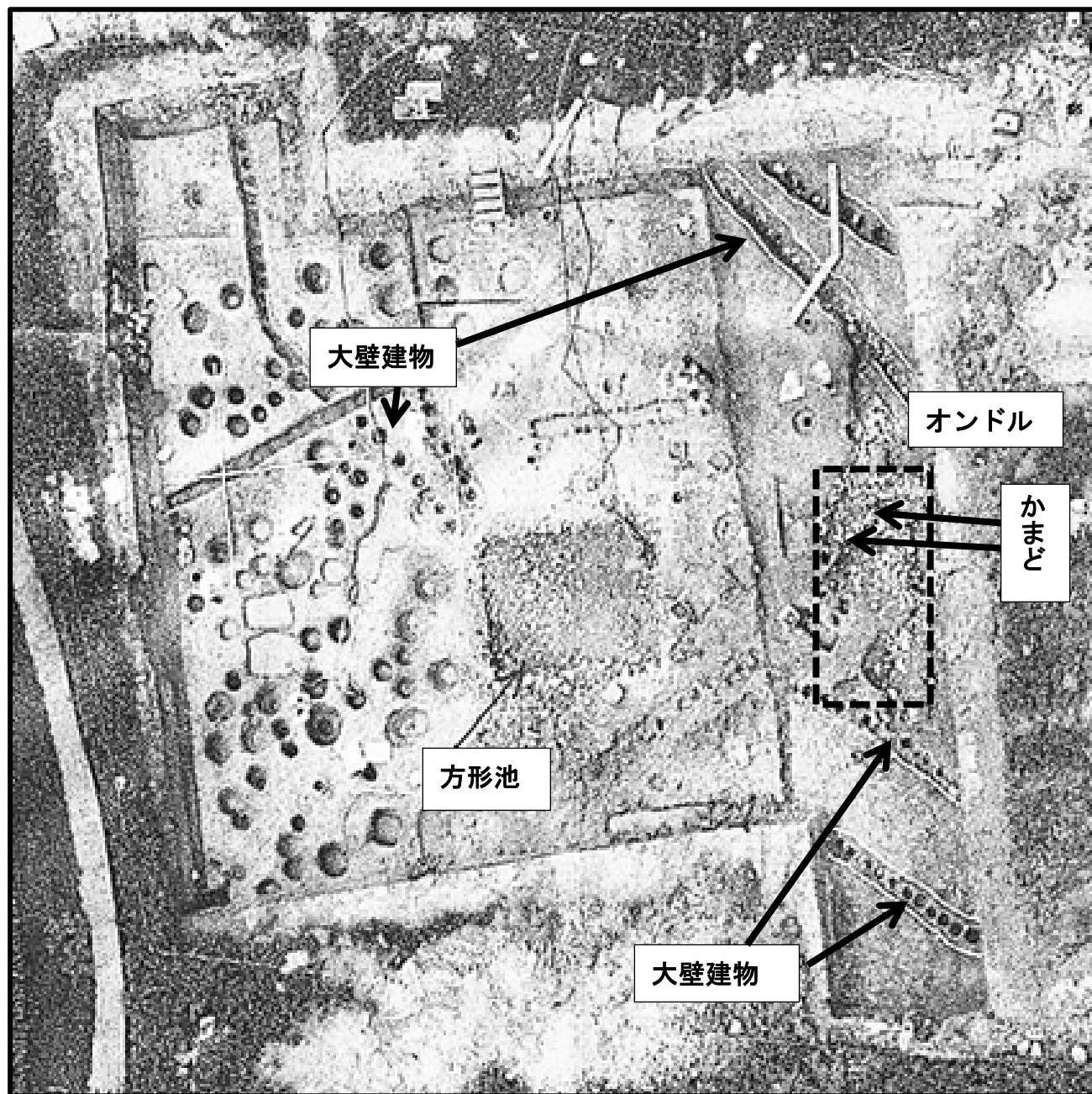
現在の明日香村桧前（ひのくま）から高取町にかけての地域は、渡来系豪族・東漢（やまとのあや）氏が本拠とした土地とされており、5 世紀後半から 6 世紀にかけて、朝鮮半島の加羅や百済からさまざまな理由で日本列島に渡来した人々は、漢（あや）氏という同族集団を築いていました。当時は、信貴山を境にして東に住んだ漢氏を東漢（倭漢、やまとのあや）、西に住んだ漢氏を西漢（河内漢、かわちのあや）と呼んで区別していました。

大壁建物とは、細い柱を溝に何本も並べて立て、それらの柱を壁土で塗り込めた住居をいいます。朝鮮半島から伝わった建築技術で、防寒性に優れています。一般の人々は竪穴住居に住んでいた時代である。当時としては最先端に行く建築工法でした。

石組みの人工池は、発掘現場のほぼ中央に位置し、東西約 5 m、南北約 4 m とほぼ四角い形をしている。このため方形池と呼ばれている。池の岸や縁は人頭大の石

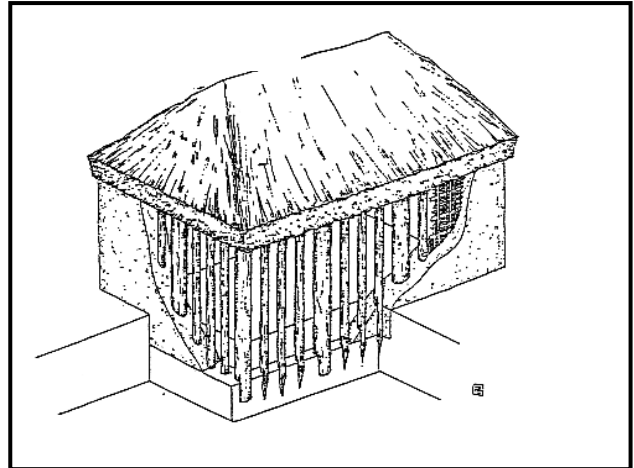
で組み立てられており、さらに底にも石が敷かれている。残存の深さは30cmで、池の4隅は丸くなっています。

観覚寺遺跡で見つかった7棟の大壁建物のうち2棟は、石組みのオンドル遺構を備えていた。オンドルとは、熱風や温水を床下に這わせた床暖房の仕組みで、現在も、韓国のマンションには温水のオンドルが設置されている。今回の発掘では、屋内から屋外に抜けるかまど用の穴が見つかったが、火をたいた形跡はなく、煙道とみられる床下の溝が折れ曲がりながら約6mも続いていました。



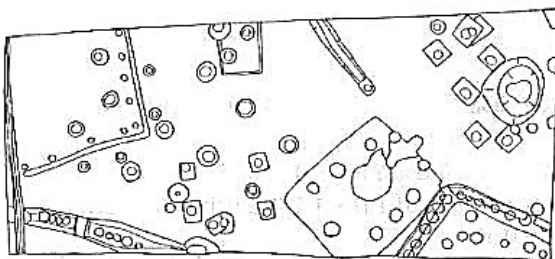


大壁建物のイメージ（高取町教委提供）



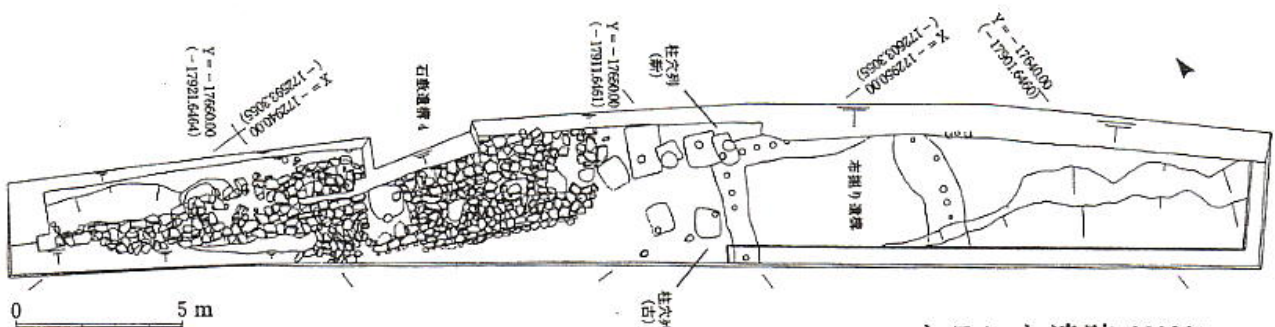
細い柱を何本も立てて塗りこめた大壁建物

オンドルを伴う大壁建物跡は南側約 1 キロ離れた平成 13 年（2001）清水谷遺跡（5 世紀後半）でも見付かっており、観覚寺遺跡と概ね同じような構造を持った遺跡で、渡来人が高取町一帯に居住していた可能性があります



清水谷遺跡 2001年

東南 1 キロ離れた平成 15 年（2003）に発掘された、飛鳥時代後期の 7 世紀後半のホラント遺跡でも石敷き遺構に合わせて、大壁建物の柱穴が出土しています。ここも、東漢氏の拠点とされる遺跡でした。



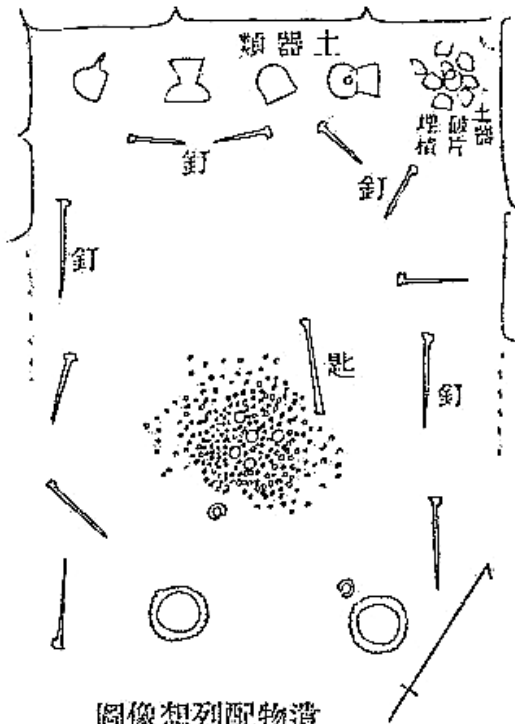
ホラント遺跡 2003年

●稲村山古墳

昭和7年（1932）開墾して果樹園とされた際、すでにそれ以前石室の天井石がなくなっていました、そのとき全て破壊されてしまいました。

古墳は円墳で、竪穴式石室があった。出土遺物も散逸し銀釧2、匙1、金環2、丸玉5、ガラス小玉約200、土器類といわれています。銀釧や銀匙などは県下でも数少ない出土品です。

被葬者は渡来系氏族である東漢氏の一族であると考えられます。



島本一……
を時的を大
指代存し正
摘`在て時
し渡`い代
て来そたの
い人の`終
るが識奈り
°明見良に
3日は県
8香卓に奈
歳・越お良
の高しけ師
若取てる範
さにい考を
で居て古出
死住`字て
去しす界学
°てでの校
いに草の
たこ分先
事のけ生

文獻上、日本書紀に據れば、此の附近は一帶に古への
檜隈地方であつて、應神、雄略兩朝の頃多數の歸化人が
來朝居住せる處であるが、此の冢園氣の中に、かゝる稲
村山古墳が存在してゐても取へて不思議はないと思はれ
るのである。

昭和7年初現 開墾中に出現した。
稲村山古墳について

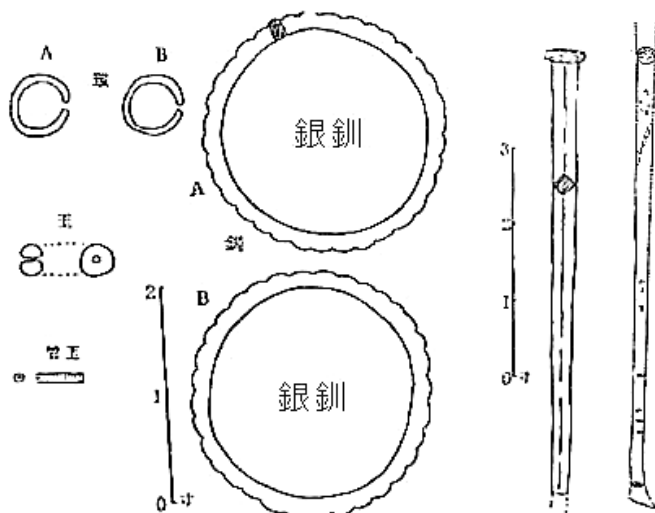
『その文化價值を論ず』

島本一 はじめ

圖像想列配物遺

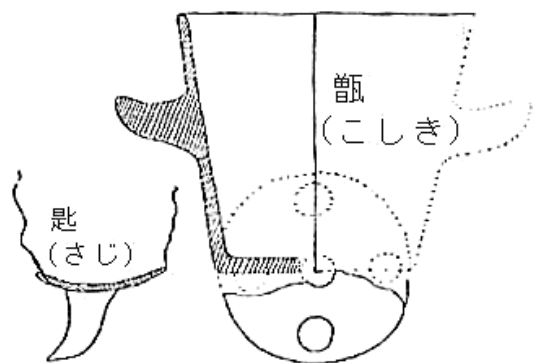
石室は破壊されていたので後から想像した図。

考古字雜誌 第27卷5号 昭和12（1937）

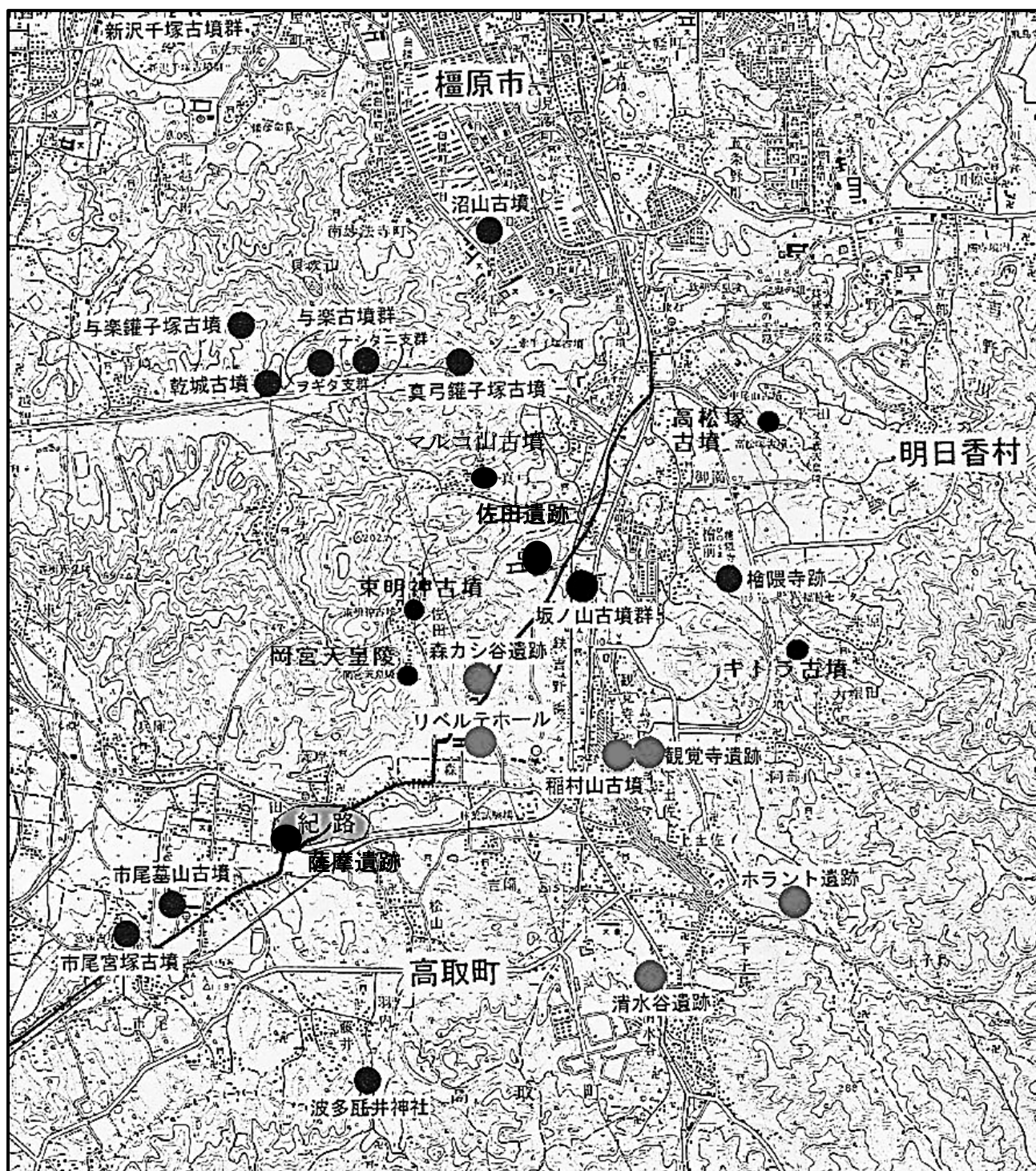


銀の釧（くしろ）というのも非常に珍しく、地位の高さが窺える。

稲村山古墳



当時この土器は、御所市で2、3の出土例があるだけで非常に珍しいものだった。用途もよく分からなかった。出土当時は相当なニュースになった。



紀路と高取町を中心とした古墳遺跡所在図

●人頭石（光永寺・前庭）

この石が、何のために、いつの時代に加工され、どこに置かれていたのかも、まったく不明なのだそうです。

顔を見ていると、張りのある目や鷲鼻や大きな口、大きな耳の特徴は、私には日本人をモデルにしたようには見えません。飛鳥石神遺跡から出土した石人像に似ているように私には感じられます。

もし同じ特徴を持つ人達をモデルとしているのなら、この像も胡人や西アジアの人をイメージしているのかも知れません。

だとすると、この石造物もまた飛鳥時代に作られたことになりそうです。



飛鳥資料館展示復元石造物
旧飛鳥小学校建物の東側から
出土。



高取の猿石
高取城跡二ノ門外、城下町に下
る大手筋と岡口門への分岐点
にある。

●子嶋寺

奈良時代以前の創建を伝えるが、草創の時期や経緯については複数の説があります。

一般に流布されているのは、天平宝字4年（760）、孝謙天皇の勅願によって報恩法師が創建したとする説である。『元亨釈書』の吉野山報恩伝や『本朝高僧伝』の報恩伝などに見える説である。それによれば、報恩法師は孝謙天皇の勅に奉じて大和国高市郡の「子嶋神祠のほとり」に子嶋山寺を建てたことになっている。その「子嶋神祠」は現在、高取町下子島（子嶋寺の南方）にある小島神社を指すとされてい

る。だが、寺伝では、創起は天平宝字4年（760）ではなく、何故かそれよりも8年早い天平勝宝4年（752）としている。

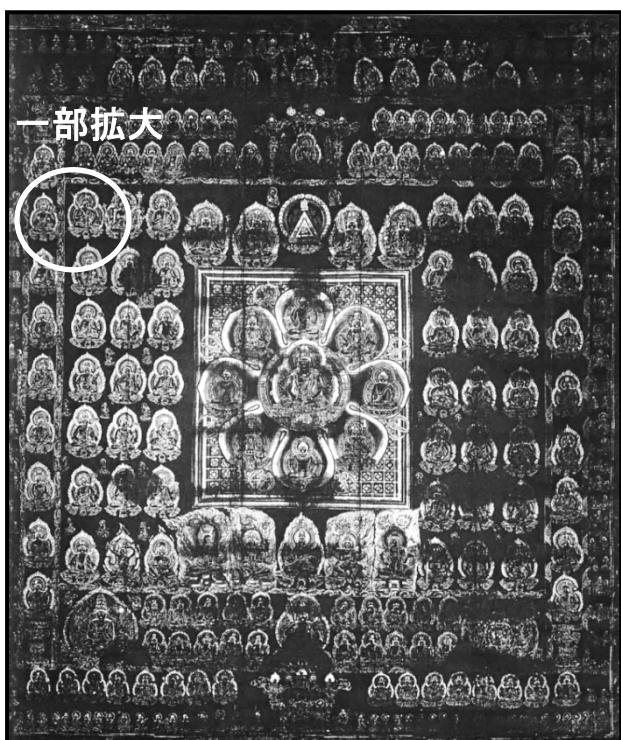
報恩の後を継いだ二代目延鎮（えんちん）は、夢に見た観音のお告げにより、京都東山の麓の霊地で音羽の滝を探し当て、そこで修行していた。そのとき、坂上田村麻呂が、妻の安産を願い鹿を求めて音羽山へ来たが、延鎮から殺生を戒められた。それが機縁で田村麻呂は延鎮の教えに帰依し、また延鎮が同じ出身地である高取町の子嶋山寺の住職であることを知り、この霊地の東山に十一面千手観音を安置し、清水寺を建立したという。これが京都清水寺の始まりとされている。

子嶋曼荼羅の名で有名な「紺綾地金銀泥絵両界曼荼羅図」2幅は平安前期のもので国宝。現在は奈良国立博物館に保存されている。重要文化財の「木造十一面観音立像」は東京国立博物館に保管されている。また山門は、高取城二の門を移築したもので、現存する唯一の高取城遺構となっている。

平安時代中期以降は観覚寺と称して興隆を極め、本堂・御影堂・三重塔など23棟の建物が並び、子院や子坊が21箇所あり、真言宗子島流の拠点として栄えたそうです。

江戸時代には子嶋山千寿院、明治36年（1903）に子嶋寺に改称されています。本堂は江戸時代末期の嘉永元年（1848）、壺阪寺の僧賢応によって建立されました。

本尊は大日如来です。



（国宝）紺綾地金銀泥絵両界曼荼羅図
胎蔵界曼荼羅図
奈良国立博物館に寄託



○部分 一部拡大

真言密教では、「胎蔵界（たいぞうかい）」と「金剛界（こんごうかい）」との二つの世界観があります。そして、世界は大日如来の慈悲を表す胎蔵界と、大日如来の智慧（ちえ）を表す金剛界とによって成り立っていると考えています。



十一面観音立像（重文）
東京国立博物館に寄託



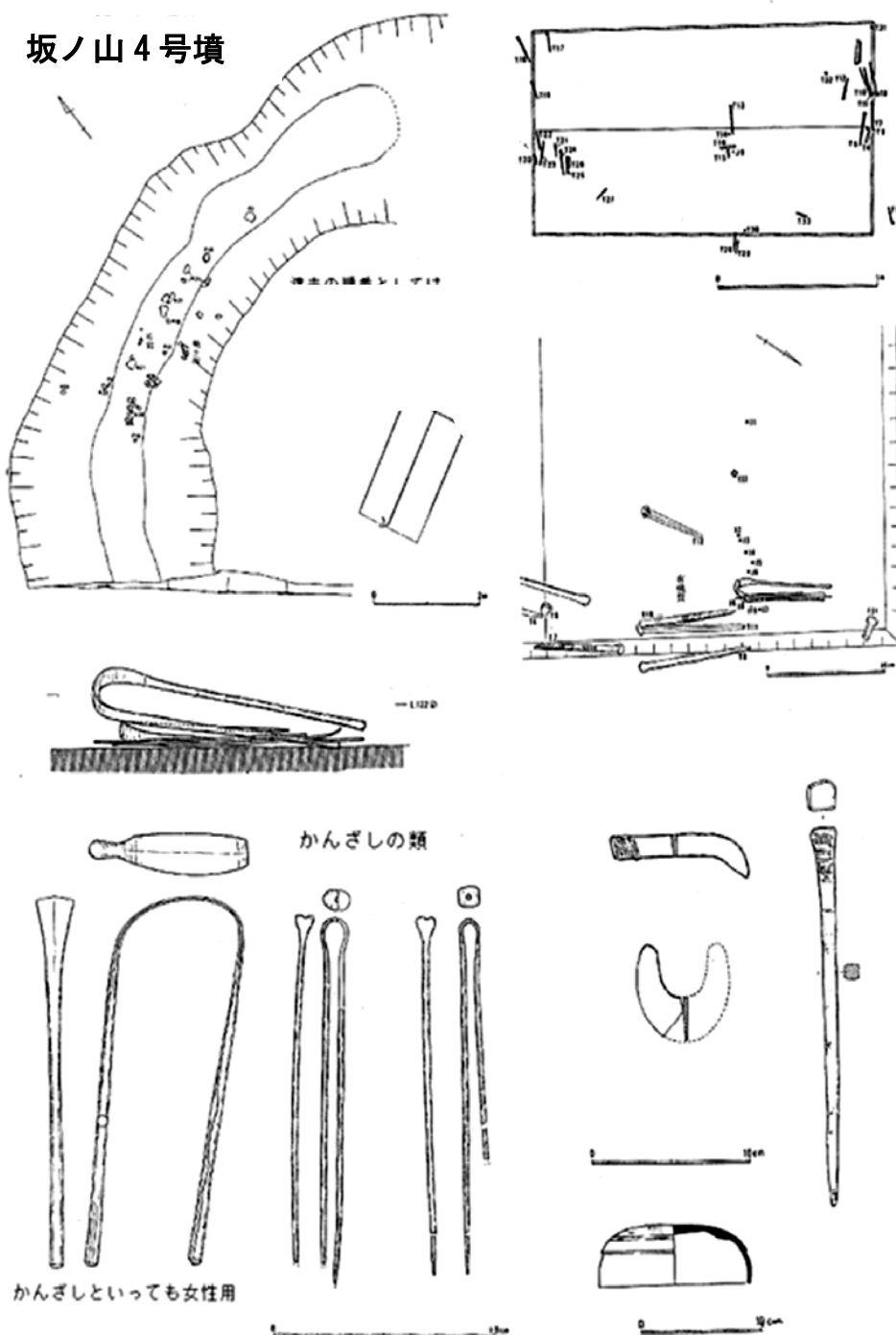
本尊
大日如来坐像

●坂の山古墳群

紀路と国道 169 号線に挟まれ、長さ約 350m、幅 100mの規模の古墳群です。遺物は大小 2 種類の釵子（さいし、カンザシ）とU字型鍬先や鎌の刃などのミニチュア農具等が出土しました。大型の釵子は髪結いに、小型の釵子は装飾に用いられ、渡来系の遺物です。この小字坂ノ山は、最初の征夷大將軍坂上田村麻呂の邸宅があり、小字坂ノ上といわれていたという伝承が今にあります。また、同じ大字観覚寺にある子島寺に坂上田村麻呂の椅像が安置されています。

坂ノ山 4 号墳

5 世紀



●佐田遺跡群

高取国際高校の建設に先駆けて発掘調査が行われ、小谷遺跡・北ノ尾北遺跡・北ノ尾南遺跡・横ヶ峯遺跡と名付けられた遺跡が発見されています。これらを総称して佐田遺跡群と呼びます。

遺構の時代は、古墳時代から江戸時代までを含んでいました。検出された遺構は、掘立柱建物、土壇、竪穴住居、溝状遺構、柱列(柵)、火葬墓、中世城郭、近世館跡などがあります。

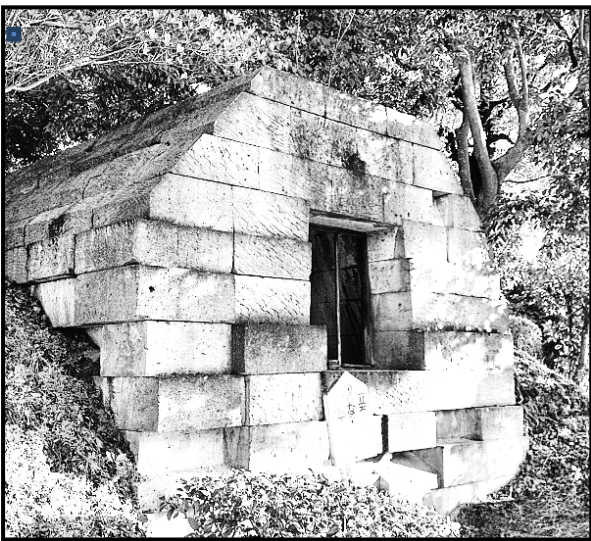
遺物としては、土師、須恵、硯、土馬、土製カマド、緑釉片、石材、瓦、瓦質土器、陶磁器、金属製品、八稜鏡などが出土しています。

調査では15基の小規模な円墳と方墳（小谷古墳群）の他に、飛鳥時代の遺構として、掘立柱建物や竪穴住居、また城郭の曲輪のような平坦面や丘陵頂部にめぐらされた柵列などありました。

移設保存されているのは高取小谷5号墳で、校舎造成以前に、体育館付近の尾根に有りました径15mの円墳で、幅3.5mの空濠が有ったそうです。両袖式の横穴式石室でしたが、採石によって大部分の石材が失われていました。室は、玄室長2.84m・幅1.79m、羨道部長4.06m・幅0.9m、天井石が失われている為、高さは不明です。須恵器・土師器が出土しているそうです。築造は7世紀ごろと考えられます。

●東明神古墳

昭和59年(1984)から2回調査が行われ、対角線の長さ30mの八角形墳であることが判明しました。横口式石槨が埋葬されていたが、それは50cm四方、厚さ30cmの石材を積み上げた家形で、石室の規模も長さ3.1m、幅2m、高さ2.5m(盗掘により推定)と大きなものでした。この石槨を復元したレプリカが、橿原考古学研究所の附属博物館の前庭に公開されています。



橿考古研附属博物館の庭にある石槨のレプリカ



発掘時の写真

盗掘されているため、出土した遺物は少ないが、漆塗木棺に使用された漆膜片や金銅製棺飾り金具・鉄釘や須恵器・土師器と人歯・骨などがある。

佐田の村に伝わる伝承に、幕末の頃までは、この古墳に玉垣をめぐらせていたが、明治時代になって岡宮天皇（草壁皇子）の御陵を指定するための調査を行うとの通知があり、当時佐田の村では春日神社横の古墳を岡宮天皇陵とのことで祀っていたが、これが正式に指定されると佐田の村は強制移住されるとの風聞が立ち、そこで村人は玉垣をはずし、石室を破壊してしまった。役人がやってきて鉄の棒を墳頂から突いたが石室にあたらず、結局御陵は佐田の村の南300mの森村の素戔鳴命神社の本殿の地と定められ（現岡宮天皇陵）、神社は東側に移動させられたことが伝えられている。

発掘調査では歯牙6本が検出され、青年期から壮年期の男性と推定されている。これは草壁皇子が28歳で没したのと符合する。石槨、棺などの特徴と古墳の周辺から出土した須恵器片などから築造時期が7世紀後半の終わりに近いと考えられること、佐田の地元では東明神古墳が草壁皇子の墓であると伝承されていること等々が、この古墳が草壁皇子の陵墓であるという説を裏付けているようだ。

この古墳は、過去に3度も盗掘にあい、副葬品はまったく残っていなかったが、漆塗木棺に使用された漆膜片と鉄釘、金銅製棺飾り金具が残っており、高松塚古墳の木棺に似た棺があったと考えられている。

草壁皇子は皇位に就くことなく持統天皇3年（689）に28歳の若さで薨去した。

『日本書紀』には「皇太子草壁皇子薨（こうむ）りましぬ」とあるだけですが、『万葉集』には草壁皇子（日並皇子）が薨去した時に彼の舎人が詠んだ挽歌が23首残されていて、その中から墓の場所がわかるものが何首かあります。

朝日照る 佐太の岡辺に 群れいつつ 吾が哭く涙 やむ時もなし（2-177）

橘の 島の宮には 飽かねども 佐田の岡べに 侍宿（とのゐ）しに行く（2-179）

つれもなき 佐田の岡辺に 帰り居（ゐ）ば 島の御橋に 誰れか住まはむ

（2-187）

朝日照る 佐太の岡辺に 鳴く鳥の 夜なきかはらふ この年ごろを（2-192）

外に見し 檀（まゆみ）の岡も 君座せば 常の御門と 侍宿（とのゐ）

するかも

（2-174）

鳥ぐらたて 飼ひし雁（かり）の児 巢立ちなば 檀（まゆみ）の岡に

とびかえり来ぬ

（2-182）

以上の事から葬った場所は、「佐太の岡」は東明神古墳のある場所となります。「檀（まゆみ）の岡」は現在の真弓の丘としたらマルコ山古墳も可能性があるようにおもいます。または「檀（まゆみ）の岡」は殯宮を営んだ場所なのではとも思われます。でも「檀（まゆみ）の岡」は現在の「真弓」より大きかった呼称ではなかったのではとも思われます。

古墳の被葬者は形状が八角形墳であり、天皇やその近親者と考えられる。また青年期から壮年期の男性の歯牙6本が検出したことで、草壁皇子（28歳薨去）と考えられ金銅製棺飾り金具の付いた漆塗木棺であり、身分のかなり高い人であると考えられることから、草壁皇子とみていいのではないかと考えます。

●岡宮天皇陵（宮内庁指定の草壁皇子の真弓岡陵）

天平宝字2年（758）に岡宮御宇天皇と追尊天皇を諡号された

10歳の時に父大海人皇子（後の天武天皇）が皇位継承をめぐって近江の弘文天皇（天智天皇の子）と争う壬申の乱を起こしたため、兄の大津皇子等と共に父母に同伴して戦場に赴いています。

壬申の乱に勝利した父は天皇として即位し、天武天皇10年に草壁皇子は立太子した。兄等を差し置いて皇太子となったのは母鵜野讃良皇女（後の持統天皇）の正妃（皇后）という立場が影響していたとされる。

父天武天皇が崩御するも、すぐには即位せずしばらくの間、母皇后が称制（即位せずに執政すること）した。しかし、草壁皇子は結局即位することなく享年28歳の若さで薨去した。

第46代孝謙天皇が第47代淳仁天皇に譲位する際に、草壁皇子に第42代文武天皇、第44代元正天皇の父であることを以て「岡宮御宇天皇」と追尊されました。

父は天武天皇、母は持統天皇であり、さらには妃の阿閉皇女は元明天皇に、草壁皇子の子の氷高皇女は元正天皇に、草壁皇子の子の珂瑠（かる）皇子は文武天皇にと身内が全員天皇に即位しています。

●素盞鳴命神社

祭神は素盞鳴命。文政4・5年（1821・2）の本殿の棟札には祭神に天照皇大神宮・八幡宮・春日大明神の三柱を奉斎したことが示されています。社殿も三社相殿造で、御神体の神像三体があったそうです。元治2年（1865）の棟札には牛頭天王となっていて、祭神が変更されています。慶応2年（1866）丙寅8月建立の狛犬があります。

●鳥ヶ峰古戦場

文久3年（1863）8月17日天誅組は、倒幕の狼煙を上げるため五條代官所を襲撃し、26日には日本一の山城高取城を攻撃すべく攻めてきて、高取藩はここ鳥ヶ峰に、城代家老中谷栄次郎を総指揮に防禦追撃体勢をととのえ、大砲4門が火蓋を切り天誅組は五條に敗走しました。（高取市役所前の案内板より）

「ブリキトースという威力ある大砲が居た。居た、としか云いようのないほど、それは生きもののような扱いを、家中から受けていた」という語り出しから、司馬遼太郎の『おお、大砲』は始まります。また『街道をゆく』7にも「大和・壺阪みち」に高取藩と天誅組が取り上げられています。大砲はリベルテホールに複製ですが展示されています。

●森カシ谷遺跡

奈良県高取町

森カシ谷遺跡



高取町教育委員会

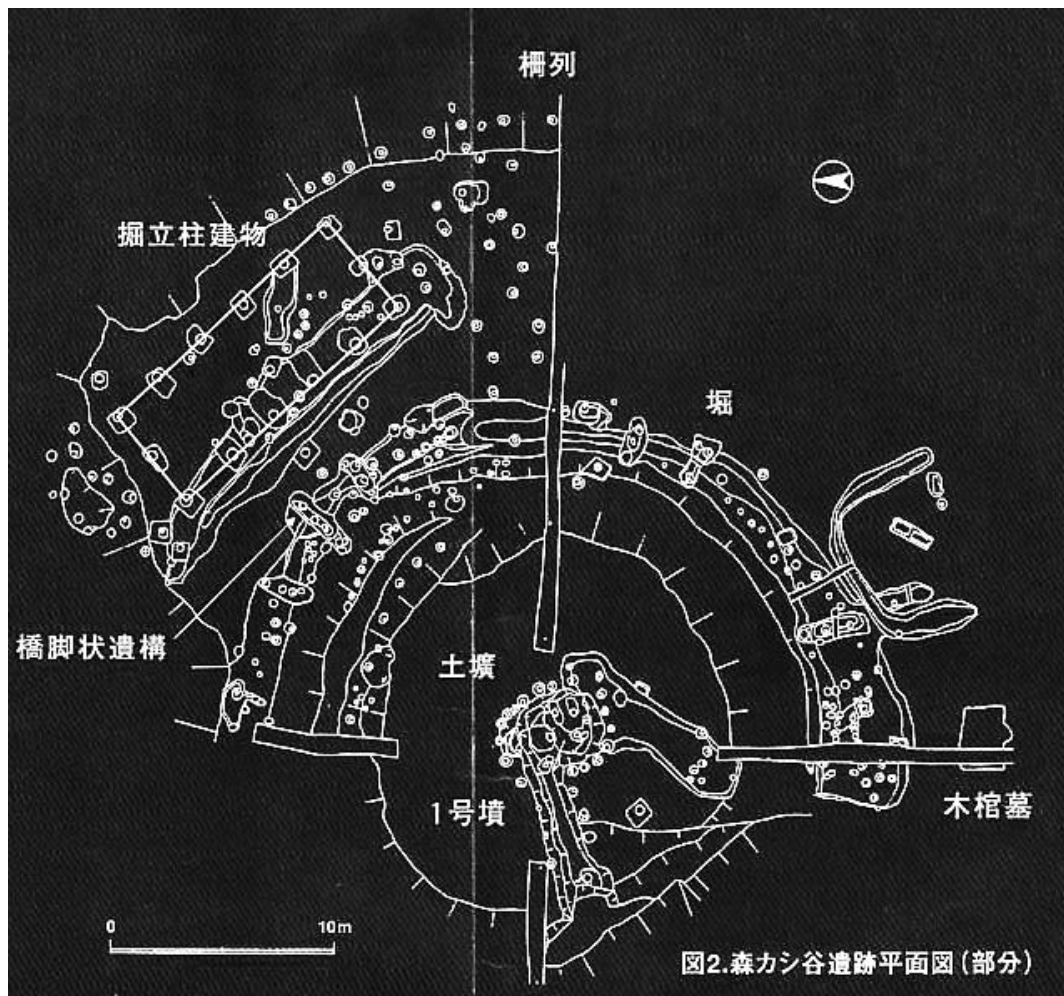


図2.森カシ谷遺跡平面図(部分)

尾根先端の頂部には6世紀に築造された古墳(1号墳)の墳丘を再利用して土郭(土段)を造っています。土郭の真ん中には東西4m、南北3m、深さ2.2m以上の長方形の土壇(土穴)があります。内部には数カ所の柱穴がありました。土壇の西側には通路が取りつきます。また周囲には柱穴がめぐります。土郭裾には堀が掘削されたり土郭を取り囲むようにおおくの柱穴があります。土郭北西の一段低くなった尾根の張り出した部分には掘立柱建物跡を検出しました。建物は尾根の斜面をカットして平坦地をつくり東西4.8m、南北12.7mの2×5間の規模です。柱掘り形の形態は一定せず掘形の深さ1.2m以上のももありました。柱は直径20cmです。建物の方向は南北より45度、東西方向に振れています。建物と土郭は木橋のようなもので接続していたと考えられる橋脚状の遺構も検出しました。建物前面と側面の三方向には柵列と考えられる柱穴列があります。また建物のある平坦地の下の斜面にも三段にわたって柱穴列を確認しています。これらの遺構からは須恵器・土師器の破片がわずかに出土しましたそのほか古墳時代後期の木棺墓、飛鳥時代に築造された終末期古墳、平安時代の土壇墓、中世の柱穴群や土壇がありました。終末期古墳は中世以降に削平され埋葬施設が残存しませんでした。墳丘背面を大規模に造成したり、墳丘一部に残る版築工法と排水溝などからこの古墳の

重要性が窺われます。

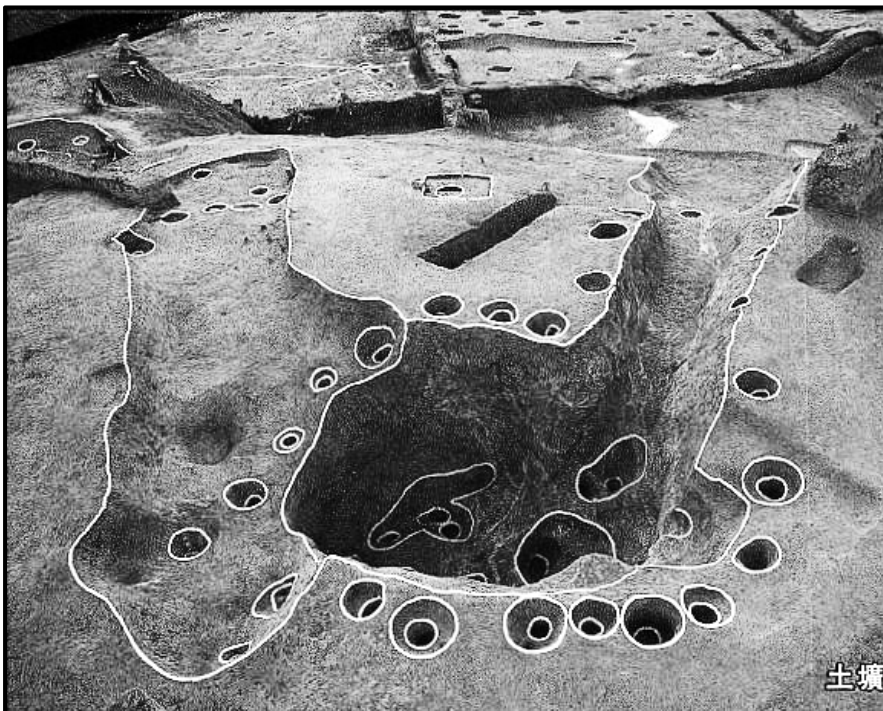
今回の調査から遺構は土郭、土壇、掘立柱建物、堀、柵などは一連のもので遠くに飛鳥中心部を見通せる立地や、下方の交通要所である紀路をおさえた古代の砦の遺構と考えられ、飛鳥を防御した施設のひとつと考えられます。遺構の存続時間は短く日常生活があったとは思えず 7 世紀末ごろには古墳（2 号墳）が築かれています。遺構のある南斜面下からは飛鳥Ⅲ・Ⅳ式期の遺物包含層があることから、遺構の時期は 7 世紀後半ごろと考えられます。

この遺跡は狼煙（のろし）をあげ、飛鳥の宮と連絡を取り合っていたと考えられます。町教委は『日本書紀』などにも記述のない急ごしらえの施設。壬申の乱（672）が起き、大海人皇子側が戦闘に備えて建てたと考えられ、緊迫した状況がうかがえるとしている。しかし殯屋の可能性も指摘されている。

この遺跡は調査終了後、土取りのためにほとんどが消滅しています。



掘立柱建物（北から）



土壇



堀



橋脚遺構（下から）



柵列

2号墳（終末期古墳）



●薩摩遺跡

薩摩遺跡は、国道169号線高取バイパスの建設に伴うもので、榎考研が建設予定地を10次にわたって調査しています。また、これとは別に近隣地域を高取町教委が調査を行なっています。

平成16年(2004)の調査では、弥生時代から古墳時代の集落と墓地が確認されました。弥生時代中期には、集落の一面に墓地が形成されています。墓地には方形周溝墓と木棺墓がありました。簡単に説明すると、方形周溝墓は平地に四角く溝をめぐらせて、墓の区域を画したものです。また、木棺墓は盛土などの施設を作らずに、平地に木棺を直接埋めたものです。

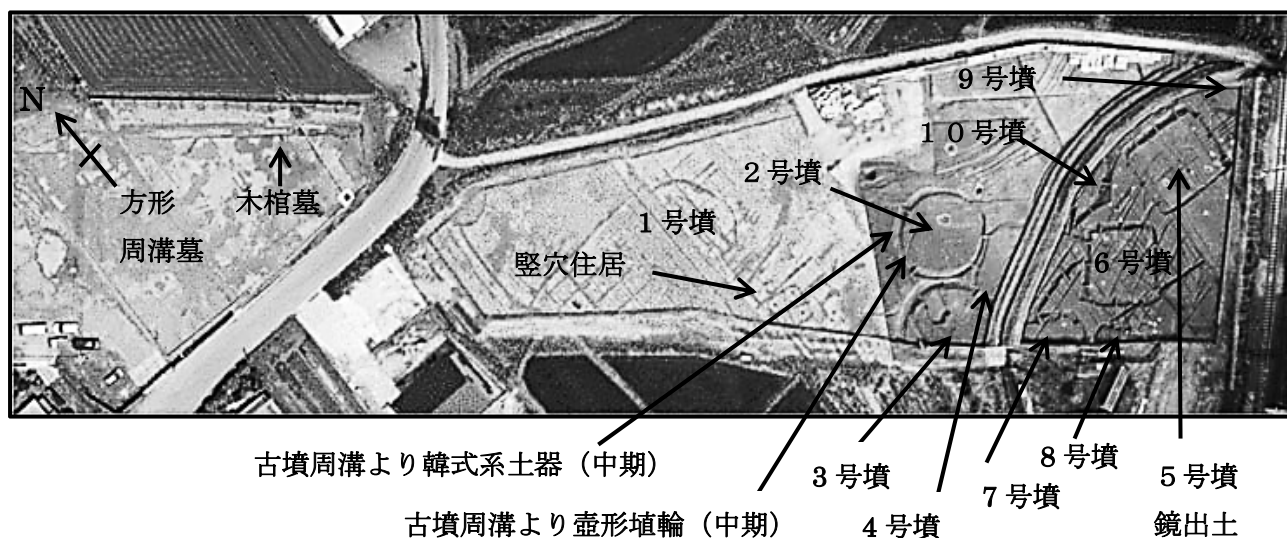
古墳時代前期のものとしては、4基の古墳が確認されました。2基は丸く溝をめぐらせた円墳、もう2基は四角く溝をめぐらせた方墳です。これらの古墳が形成された後には、集落が形成されます。3棟の竪穴住居が確認されていますが、さらに南へ展開するだろうと考えられています。

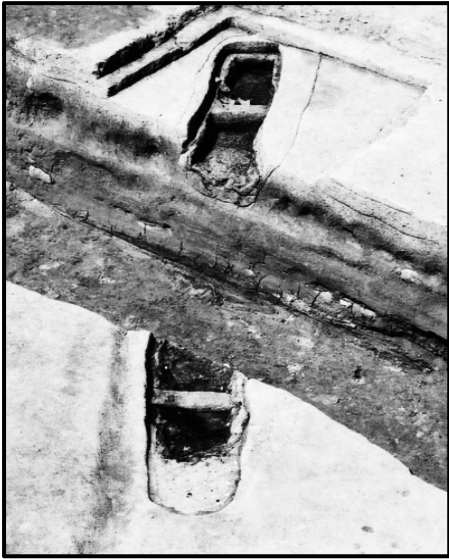
古墳時代中期になると集落が放棄されて、再び古墳群が形成されます。これは円形や方形の周溝をもつ古墳群で、5基の古墳が確認されています。その内の5号墳では、埋葬施設が残っており、副葬品は、銅鏡1面、漆塗りの櫛、それに鉄製甲冑、刀剣類などがあり、とりわけ銅鏡は4ヶ所に獣の文様を配した類例のない珍しい物でした。この古墳は、一辺10m程度の方墳で、中央に木棺を直接埋める木棺直葬でした。

平成21年(2009)この薩摩遺跡から奈良時代(8世紀)の道路跡が見つかり、紀路か紀路に繋がる支線道路ではないかと報じられました。

検出された道路跡は、南北に長さ20m分だとされ、路面の両側には幅60cm、深さ40cm、の側溝があったとされました。側溝からは奈良時代の須恵器片が出土しました。側溝間は9mあり、これが道路幅だとされました。

薩摩遺跡全景（奈良県立橿原考古学研究所 2004年現地説明会資料より）





弥生時代木棺墓



古墳時代中期古墳の周溝から出土した
韓式系土器



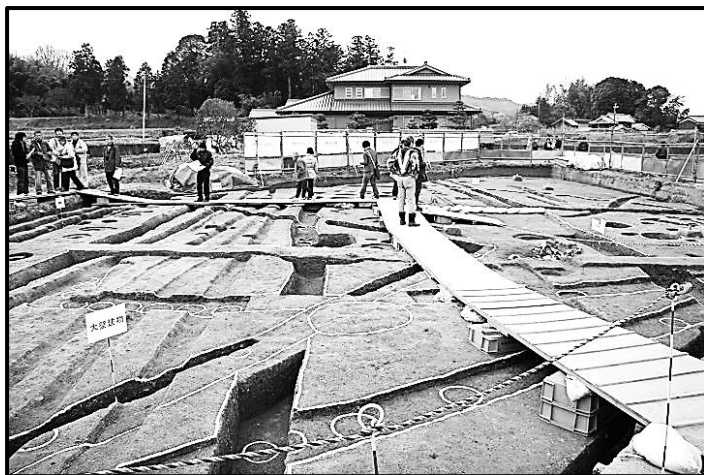
古墳時代前期の竪穴住居跡



古墳時代中期古墳の周溝から
出土した埴輪

古墳時代中期の5号墳主体
部から出土した銅鏡





2009 年 2 月 22 日 薩摩遺跡
現地説明会



平成 20 年（2008）年末に、奈良時代末～平安時代前半（8 世紀末～9 世紀前半）ごろの灌漑用ため池跡や、檜前村寸の名を記した木簡などが見つかっています。

さらに平成 21 年（2009）2 月にも発表され奈良時代（8 世紀）の道路跡が見つかりました。

町教委によると、出土した道路遺構は南北方向に長さ約 20 m。幅は約 9 m で、当時の長さの単位では 3 丈（1 丈は約 3 m）に相当し、規格に基づいて造られたことが分かった。両側にそれぞれ幅約 60 cm、深さ約 40 cm の側溝が平行に走っていた。側溝の東側には、道路に沿って塀が設けられ、道路周辺も整備されていたことが判明しました。

5 世紀中ごろに整備された紀路は、発掘現場付近では北東から南西へ延びると想定されていたが、奈良時代に土地を南北方向に区画する条里制の施行に伴って、道路が南北方向に再整備された可能性もあるという。

道路沿い東側からは一辺 5 m 以上で、柱を建てるための穴が一辺 1 m と、しっかりした造りの大型建物跡も出土。庇が設けられ、通常の建物より格が上の施設で、地方役所の倉庫だった可能性があり、溝からは 8 世紀後半の須恵器の破片が見つかりました。

●市尾墓山古墳（国指定史跡）

墳丘は、全長6.6m、後円部径3.9m、高さ1.0m、前方部幅4.9m、高さ1.0m、前方部を北西に向ける二段築成の前方後円墳です。くびれ部両側に造出しがあります。周濠幅3m、幅1.2m、高さ3mの外提が取り巻いています。

埋葬部は、後円部南東に開口した全長9.45m、玄室長5.9m、幅2.45m、高さ3m、羨道長3.5m、幅1.8m、高さ1.7mの右片袖式横穴式石室です。

石室築造時には、石棺蓋を奥壁側から搬入するため一時的に開口されており、後に閉塞石で閉じられたようで、石積が他の壁面とは様相を異にします。

古墳は平地に盛土をして築造されているため、石室の地盤の安定と排水を考慮して、石室の下には基盤石を置き上に粘土で床面を作っています。

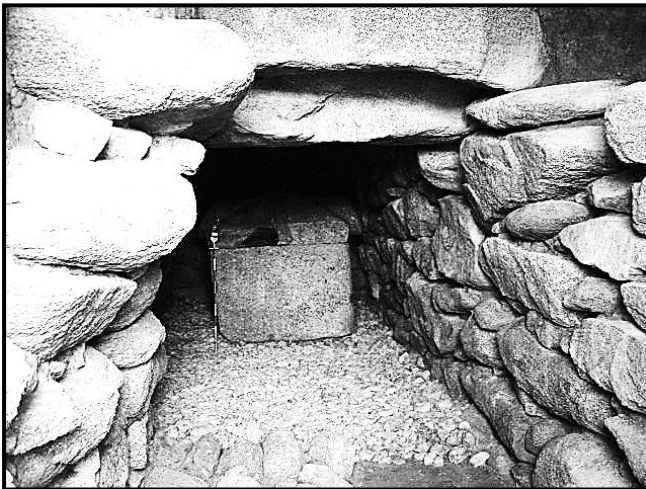
石棺は、二上山の凝灰岩の刳拔式家形石棺で、長さ2.61m、幅1.27m、高さ1.39mで、内部には朱が全面に塗られていました。

出土遺物は、副葬品として鉄刀、刀子、鉄鏃、飾金具、馬具、玉類、須恵器、土師器などがありました。また墳丘からは、円筒埴輪、朝顔形埴輪、鳥形木製品他が出土しています。

築造時期は6世紀初め頃と思われます。

6世紀の初め頃と言えば、継体天皇の時代である河上邦彦氏などは、『日本書紀』継体天皇の朝廷で大臣（おおみ）の要職にあった巨勢男をこの古墳の被葬者に想定しています。

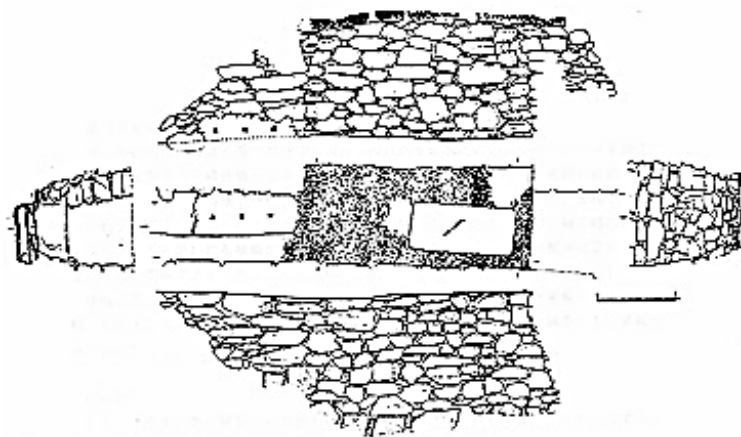
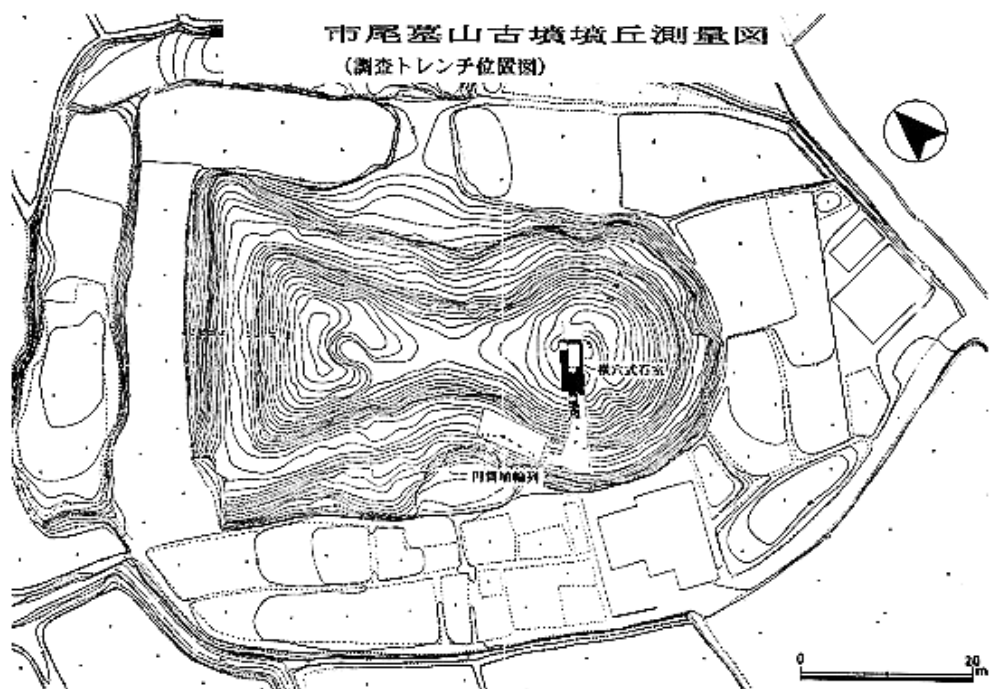
昭和56年(1981)、市尾墓山古墳は国の史跡に指定された。



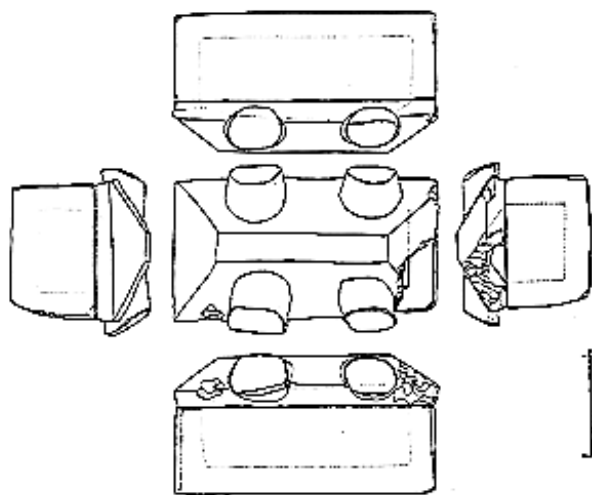
横穴式石室の内部



石棺



横穴式石室実測図



家形石棺実測図

●市尾宮塚古墳（国指定史跡）

墳丘は、全長 44 m、後円部径 23 m、前方部幅 23.5 m。前方部を東に向ける前方後円墳です。

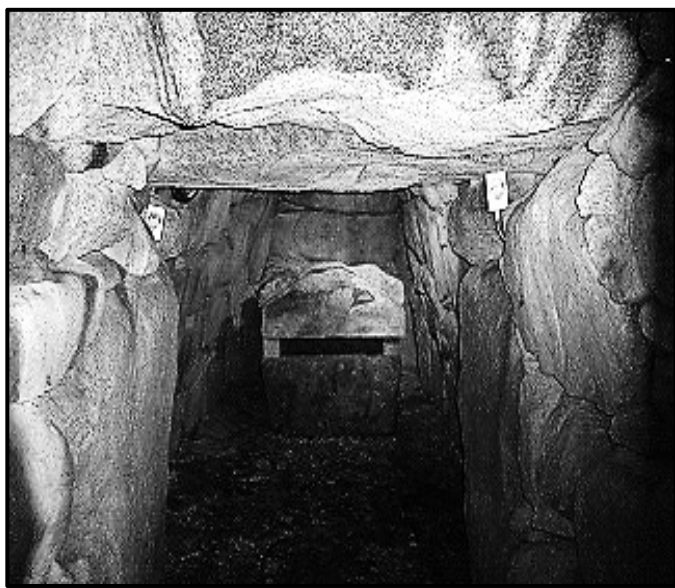
埋葬部は、後円部に横穴式石室が北向きに開口し、全長 11.6 m、玄室長 6.2 m、幅 2.5 m、高さ 3 m、羨道長 5.4 m、幅 1.5 m、高さ 1.8 mの両袖式横穴式石室です。床面には礫が敷き詰められ、Y字型の排水溝が検出されています。

玄室中央奥寄りに二上山白色凝灰岩製の刳貫式家形石棺が半壊状態で残存しています。長さ 1.9 m、幅 1.2 m、高さ 0.65 mで、縄掛突起の形状は市尾墓山古墳の石棺より新しい形式だとされるようです。現在、石室内にある石棺は、破片をつないで復元されたものです。また、石棺の前には木棺が 1 基以上追葬されていたようです。

出土遺物は、金銅製杏葉、金銅鈴、水晶製の三輪環、銀製魚形歩揺など多彩な副葬品が出土しています。

築造時期は **6 世紀中頃**とされます。

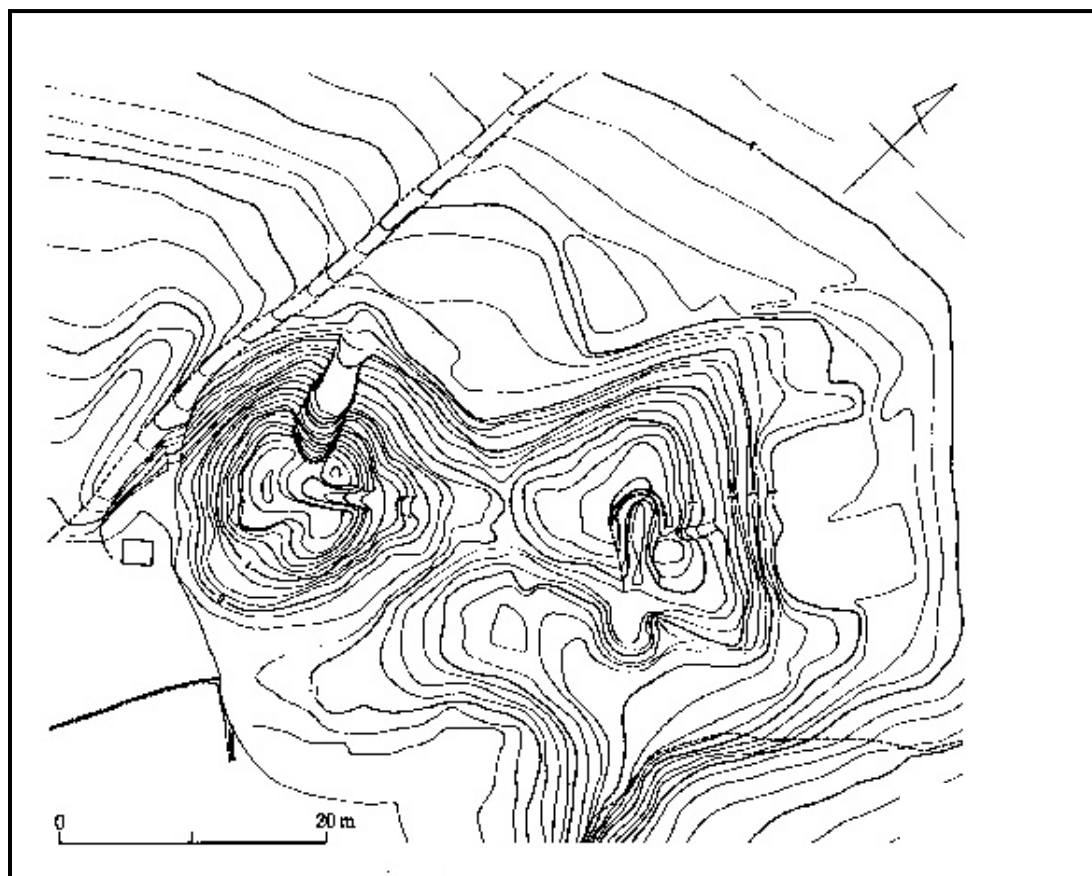
被葬者は、市尾墓山古墳の被葬者の次代を担った巨勢氏の首長だとみられています。



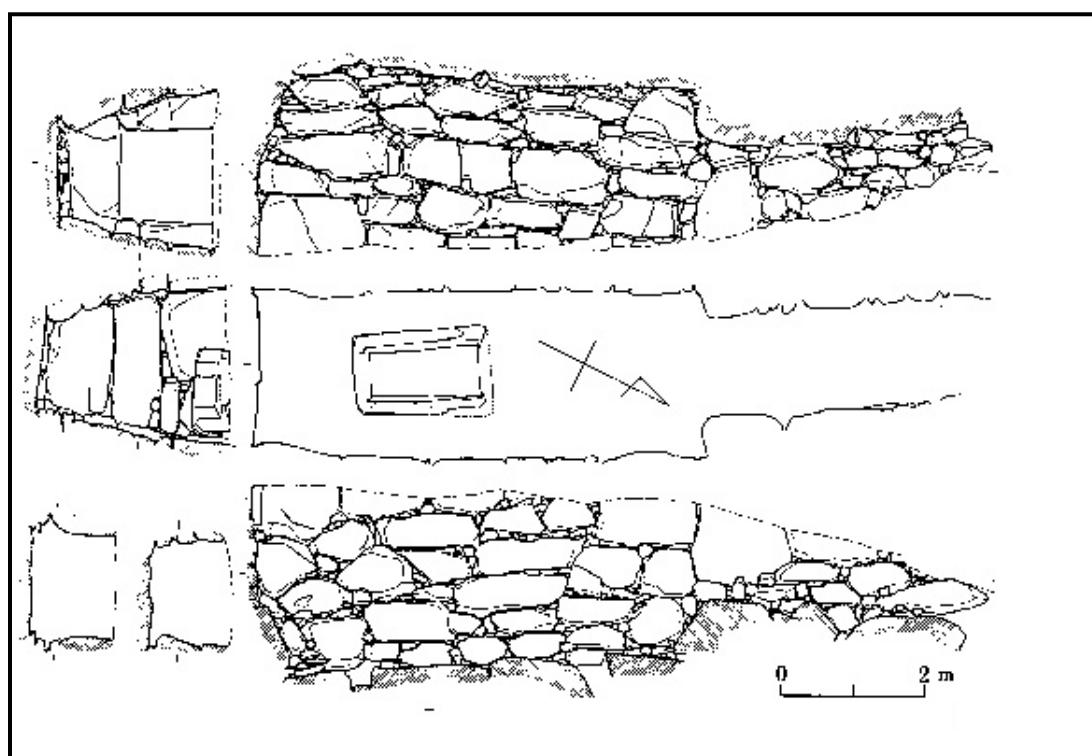
後円部北に開口した石室。
両袖式横穴式（全長 11.6m）



二上山の凝灰岩製家型石棺



市尾宮塚実測図



市尾宮塚古墳石室

市尾宮塚古墳出土の副葬品



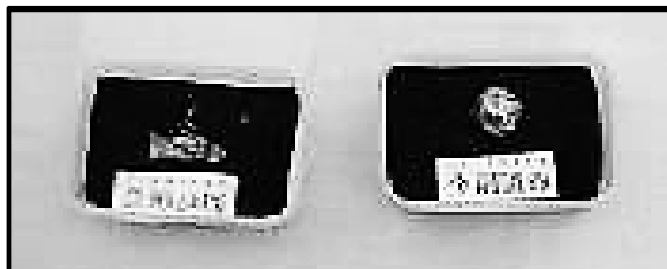
水晶三輪玉・環頭大刀



金銅製耳環・ガラス玉・トンボ玉



金銅製耳環・水晶切子玉・銀製空玉



魚形歩揺・金銅製鈴



金銅装鞍金具/杏葉/辻金具